

# グローバル化と感染症——遣唐使と痘瘡，元寇とペスト， コロンブス交換と梅毒，幕末のコレラ そして21世紀のCOVID-19

早川 智

ギリシア語で時を表す言葉にはクロノスとカイロスがある。過去から未来へ絶え間なく流れてゆく悠久の時間がクロノスであり，何らかの出来事でそれまでの価値感や社会が大きく変動するのがカイロスである。わが国の歴史では今年で75年になる第二次世界大戦の終戦，そしてその77年前に当たる明治維新が典型的なカイロスであろう。今回のCOVID-19パンデミックも後世からは日本史におけるカイロスと評価されるに違いない。

本会会員には，私も含めてNHKの大河ドラマ好きの先生が多いに違いない。時代考証やストーリーの矛盾はさておき，1963年の「花の生涯」から今年の「麒麟が来る」で59作の中には戦国時代と幕末が圧倒的に多い。16世紀と19世紀は大航海時代と帝国主義によるグローバルイズムに，否応なしにわが国が巻き込まれた時期である。このような変革期にいかにも人々が生きたのかというのはグローバル化の流れがますます加速している現代人の共感を呼ぶのであろう。15世紀末にアメリカ大陸からヨーロッパにもたらされた梅毒は二十年を経ずして我が国に渡来し，猖獗を極めた。

南蛮人は鉄砲やキリスト教とともに南蛮医学をもたらした。宣教師や医師により西洋医学の技術のみならず，ヒポクラテス以来の医の倫理がもたらされた。若い時 医師であったと伝えられる明智光秀はその思想に影響された可能性がある。春秋の筆法を借りれば，これが本能寺の変の誘因かもしれない。古くは7-8世紀に唐から移入した痘瘡は権力の絶頂にあった藤原四兄弟を斃し，疫病治療祈願の大仏建立となった。13世紀にはシルクロードの開通と元の世界帝国が中央アジアに由来するペストを西洋に及ぼしたが，鎌倉武士の奮闘と神風で辛くも元寇を乗り越えた日本はこれを免れている。天然のロックダウンを行うことで台風が日本を救ったことになる。19世紀には麻疹やコレラのパンデミックがあったが，微生物と感染症，免疫，無菌法の発見は幕末明治の日本にほぼリアルタイムで入ってきており，これが今日の我々の臨床の礎となっている。輸入感染症と日本そして世界の歴史について概説したい。

(第55回日本医史学会神奈川地方会 秋季例会・  
日本医史学会9月例会 合同例会)

## 書 評

### 秋田茂・脇村孝平 責任編集 『人口と健康の世界史』

MINERVA世界歴史叢書全16巻が2016年より刊行されつつある。その第Ⅲ期「人と科学の世界史」に含まれる第8巻『人口と健康の世界史』が秋田茂，脇村孝平の責任編集で刊行されたので紹

介して少しく書評を加えたい。

本叢書は若手の歴史学者を含む、それぞれが得意とする専門分野の論文を集成している。

時宜にあった興味深い内容の論文が並んでい